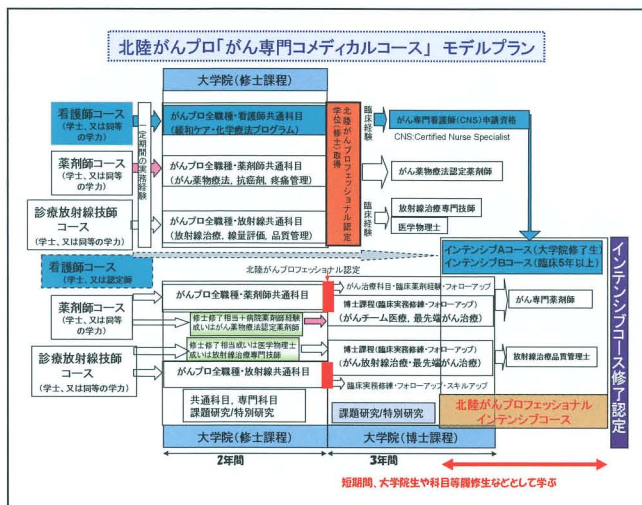




「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」におけるがん専門看護師の育成

教授 牧野 智恵



平成19年4月から施行された「がん対策基本法」の第14条には「国及び地方公共団体は、手術・放射線療法・化学療法その他のがん医療に携わる専門的な知識及び技能を有する医師その他の医療従事者の養成を図るために必要な施策を講ずるものとする」と記載されている。この趣旨に基づき、文部科学省特別研究事業として、金沢大学、富山大学、金沢医科大学、福井大学と石川県立看護大学の5大学が、昨年春から「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」をスタートした。このプランの目的は、北陸3県のすべてのがん診療連携拠点病院が協力して「がん医療の担い手となる高度な知識・技術を持つがん専門医師及びがんに関わるコメディカル等、がんに特化した医療人の養成を行う」ことである。本大学では、博士前期課程においてがん看護専門看護師の育成をはかることで本プログラムにおいて重要な役割を果たしている。また、2008年10月からはがん専門看護師教育課程を修了した者に対する支援として、「北陸がんプロ・インテンシブAコース」を開始し、がん看護専門看護師として「教育、相談、倫理調整、実践、調整、研究」の役割の充実に向けて事例検討会を(3回(5コマ)/半期)開催している。

今後は、施設内でのがん看護の充実のみでなく、在宅がん看護(在宅緩和ケア)の充実のために在宅がん看護に関する事例検討も募集し、北陸3県におけるがん看護の発展に努めていきたいと思う。

目次

「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」におけるがん専門看護師の育成	1	新人看護師等を対象とした電話相談事業を試行して	5
大学の主な動き		新任教職員紹介	5
平成20年度卒業式・学位授与式	2	母性・小児看護学講座紹介	5
卒業生の言葉	2	キャンパスライフ	
修了生の言葉	2	第9回看大祭を終えて	6
卒業研究発表会	3	看護大学駅伝チームの活動	6
修士論文発表会・博士論文発表会	3	この1年を振り返って	7
UWSONホイットニー教授の大学院特別講義	4	図書館案内	8
「地域課題研究ゼミナール」の取り組み	4	地域ケア総合センターから	8
		卒業生の内定状況	8
		キャンパススケジュール 2009年度	8



石川県立看護大学

ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

大学 看護学部看護学科
大学院 看護学研究科

〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319
URL <http://www.ishikawa-nu.ac.jp/>
E-mail office@ishikawa-nu.ac.jp

大学の主な動き

平成20年度卒業式・学位授与式

紅梅が凛とした花をまさに咲かせようとする春の佳き日となった3月14日、平成20年度卒業式・学位授与式が挙行されました。谷本知事はじめ各界の来賓のご臨席を賜り、またご家族の温かなまなざしの中で、看護学部卒業生84名、看護学研究科博士前期課程修了生4名、博士後期課程修了生2名の計90名が、本学を巣立つこととなりました。今年度は大学院の完成年度であり、北陸で初めての看護学の博士が誕生しました。

学長は式辞の中で、ダーウィンの功績を例に、事実を信じてこれまでの考えを疑い、新しい道を見いだす科学的なやり方について述べられ、事実を観察して自分の力で考えていける力があることを信じて、新たな一歩を踏み出すようにと前途を祝されました。谷本知事からは、高い志をもって専門職として新しい道を歩むことへの期待が告辞の中で述べられました。在学生を代表して中村のぞみさんからは卒業生・修了生への感謝の気持ちと先輩につづく決意が、卒業生総代の星野夏樹さんからは看護職への第一歩を踏み出す熱い思いと生涯学び続ける決意が、博士後期課程修了生の大島千佳さんからは研究能力のさらなる向上と看護の発展に貢献する決意が述べられました。

卒業生・修了生が歌った「未来」のように、足元を見て、そして前を見て自分の歩く未来をたくましく歩み続けてほしいと願っています。

学生部長 丸岡直子



卒業生の言葉



先日、入学式の写真を見ながら、この大学へ初めて足を踏み入れた日のことを思い返し、歳月の流れの速さを痛感しました。

この4年間の講義・実習などをとおし私達は、ある時は壁にぶちあたり看護を行なう難しさを知りました。またある時は、自分が行なったケアが対象の方を笑顔にし、看護を行なう楽しさを感じることができました。大学生活で起こった全てのことが、私達を人間的に一回りも二回りも成長させてくれたのではないかと思います。

4年生になってからは地域・在宅の実習、卒業研究など慌ただしい毎日を過ごしながら、刻一刻と迫る卒業に向かって、残り少ない学生生活をしようとう友人達と濃厚な時間を過ごすことが出来ました。そして、この時間はこのような仲間に出会うことができ、本当によかったなと思える瞬間でした。

これから私達4年生は、一人一人が選んだ道に進んでいきますが、大学生活で出会えたすべての人々に感謝しながら自分が目指す道を追求していきたいと思っています。

4年 星野夏樹

修了生の言葉



成人看護学分野・がん看護専門看護師（OCNS）教育課程で学んだ2年間は、私にとってよい出会いの連続でした。

実践と研究を上手に行き来しながら看護を考えている講師陣、困難な状況の中でも患者の納得のいく生を支えていくという強い信念で実践にあたったOCNSとの出会いは、とても新鮮でした。また、県外の実習場所の先々で本学の学部卒業生が声をかけてくれ、心が和みました。本学を卒業した看護師の終末期患者さんへのケアはとても丁寧で、気持ちがこもったものでした。

そして一番の出会いは、終末期の患者さんたちです。研究においてはつらい症状の中でも自分の気持ちを率直に語ってくださり、一緒に泣き、そして笑いました。それらの患者さんと出会えたことは奇跡のようでもあり、私の大きな宝になりました。

このような出会いが支えとなり、なんとか修了することができました。OCNS教育課程の開設、認可にご尽力くださった大学関係者の皆様、講座を越えて支援してくださった先生や先輩の皆様、実習先でお世話になった皆様、そして一緒に学んだ仲間たちに感謝し、これらの出会いをまた次の出会いにつなげていけるよう、新たな一歩を踏み出していきたいと思っています。

大学院博士前期2年 坂井桂子



博士前期課程では、母親の愛着型と養育態度には関連性があることを明らかにしました。その結果は、次世代に子育ての内容や質が伝達される可能性が高いことを示し、子育て支援はなるべく早期に、出来れば妊娠中から集団を対象とした心理的なアプローチが必要と考えました。そこで、博士後期課程では、心理的アプローチを取り入れたマタニティークラスを編成し、その効果を検証することにしました。介入群では、Virtues ProjectのApproachを取り入れ編成・実践し、結果は特性的自己効力感・自尊感情を上げる効果があることを論文としてまとめることができました。ここまで到達できたのは、一重に諸先生方のご指導の賜物と深く感謝いたしております。今後も、この大学で培った探究心を生かし、助産師として、研究と実践が結びついた活動ができることを祈願するところです。博士前期課程とともに博士後期課程も本大学の1期生として修了することに感慨深いものを感じ、また、それに伴った責任も感じています。

大学院博士後期3年 浦山 晶美

卒業研究発表会

本年1月7日に4年次生の卒業研究発表会が開催されました。本年度は84名の学生が1年間取り組んだそれぞれの研究の成果について発表を行いました。

4年次生全員が卒業研究に取り組むのは本学の教育課程の特色の一つと言えます。卒業研究は時間的にも限られているので、大学院での研究などと比べるとどうしても不足する部分が出てきます。それでも、基本的なアイデア・発想という点では優れた研究もあり、もう少し時間をかければ学会発表や学術論文として公表できるのではないかとと思われるものもありました。

学生生活の集大成として卒業研究をやり遂げたことは、大学で学んだということに対する自信につながります。また卒業研究を通じて学んだ問題発見や解決の手法、自分の考えを相手に伝えるための伝えるプレゼンテーションの技法などは、今後社会に出てからもいろいろな面で役立つことと思います。

卒業生の皆さんの今後の活躍を期待します。



修士論文発表会・博士論文発表会

平成21年2月3日に博士論文発表会、2月19日に修士論文発表会が開催されました。

修士論文発表会は、本学では4回目になります。博士前期課程の大学院生4名が、2年にわたる博士前期課程の総まとめとして、よりよくしたい看護の研究課題について、試行錯誤しながらも真剣に追究してきた研究成果を発表しました。質問や意見にも一生懸命に答え、発表時間一杯、活発な討議がなされました。今後は、看護の実践の場や教育の場で、実践者・教育者・研究者として、さらに研究的能力を研鑽しながら、よりよい看護を追究し続け、看護実践の発展のために活躍していただきたいと思います。

博士論文発表会は、本学では1回目の開催であり、博士後期課程が完成年度をむかえました。第1期生である博士後期課程の大学院生2名が、3年にわたる博士後期課程の総まとめとして、よりよくしたい看護の研究課題について、予備審査や論文審査等の関門に合格しながら、追究し精錬し続けてきた研究成果を発表しました。研究成果を皆さんに伝えたいという熱意や、堂々とした質疑応答ぶりも印象的でした。今後は、自立した教育者・研究者として、よりよい看護を追究し続け、看護実践の発展のために活躍していただきたいと思います。

研究は、その意義をご理解、ご協力いただいてできるものです。研究にご協力いただいた関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

UWSONホイトニー教授の大学院特別講義

本学大学院の「国際看護学特論」科目は隔年開講である。今年度はその開講の年であった。今年も学術協定を結んでいるワシントン大学看護学部 (School of Nursing, University of Washington, Seattle) から教授を招聘した。今回7コマの授業を担当してくださったのは、ホイトニー教授 (Joie Whitney, PhD, RN, CWCN, FAAN) でした。

9月26日から10月2日までの5日間の集中講義「Planning and Designing Clinical Research」と題され、研究の基本であるトピックの選び方、文献検索方法、研究目的を果すための具体的な研究方法論などが詳細かつ丁寧に教授された。受講した大学院生は合計8名で、授業内外で積極的に質問をするなど大いに刺激を受けていた。質問内容は大学院生らしく臨床経験の中で出てきたと思われる非常に具体的なものが多かった。ホイトニー教授はそのような質問全てに、的確に答えていた。彼女たちの研究がきっと素晴らしいものになると確信している。

本来、UW招聘教授の講義のコーディネートは昨年度の学術研究員の役割となっているが、今回も授業内容の確認やスケジュール調整など全ての業務を担わされた。日々何度もメールのやり取りをしながら仕事の内容を詰める日々が10ヶ月以上におよんだ。それでも最後までハプニングが起これ、その対応に追われた。しかし国際交流委員のWGメンバー (今磯、川村、宮西) や総務課 (井田、菅田) の多大な働きがあり、ホイトニー教授には本学での仕事を堪能していただけた。また初めての日本滞在に良い印象を持っていただけた。そして本学の大学院生に研究の面白さを感じさせる講義を提供できた。

なお、この特別講義は許可を得てビデオ録画されている。図書館に保管される予定であるため、学生はもちろん教職員にも視聴していただければと思います。

「国際看護学特論」科目担当者、国際交流委員長 末弘美樹



ホイトニー教授による授業のひとつ



大学院生によるフェアウェル・パーティー

「地域課題研究ゼミナール」の取り組み

私のゼミでは今年から、4年生のそれぞれが地域住民の健康や体力に関する課題を取り上げてその解決策を住民と一緒に考えながら成果をまとめるという「地域課題研究ゼミナール」を展開しています。このような活動にトライした理由は、卒業研究で得た知識や経験をぜひ将来の仕事に活かして地域の看護や介護の重要な役割を担ってほしい、と思うからです。

今年取り組んだテーマの一つは、「健康づくり政策」です。かほく市は、高齢者の医療費が県の平均と比べて高いという課題を抱えています。しかし一方で、かほく市は豊かな自然環境を有するという強みがあります。そこで、このような地域の強みを活かして「食」・「遊び」・「癒し」を体験しながらウォーキングを行えば健康になれるきっかけを作れるのではないかと仮説を立て、それを検証することを目的にゼミで力を合わせて課題に取り組みました。4年生を中心に1、2年生のボランティア学生の協力を得ながら、かほく市商工会と連携して市内でのウォーキングツアーを試験的に行いました。ツアー当日は、消費カロリーや心拍数の変化を調べるとともにツアーの満足度をアンケート調査して、健康の回復や維持に効果があるのかを検討しました。その結果、地域住民と交流しながら自然と触れ合うウォーキングツアーはこころと身体を健康を維持・増進させる可能性が高いと考えられることがわかりました。このような成果を報告書にまとめて研究発表したところ、大学コンソーシアム石川から敢闘賞をいただきました (写真)。今後の課題は、大学と地域とが一体となってウォーキングツアーを展開できる組織を作り、なぜこのようなツアーを行うと健康になれるのかという理由をはっきりとさせることであると思います。

学生のみなさんには、地域社会の役に立てると思えることがあればどんな小さなことでも取り組むチャレンジ精神を持ってほしいと思います。

准教授 垣花 渉



新人看護師等を対象とした電話相談事業を試行して

地域ケア総合センターでは、新人看護師を支援するために講演会やシンポジウムを開催しているが、その一環として平成20年度は10月から3月までの半年間、「新人看護師等電話相談」を試行した。週1回木曜日午後2時間だけの電話相談でもあり、相談件数は少なかった。電話相談開設にあたり、実施要領、倫理規定、具体的なマニュアル等の作成はもとより、電話相談の特性としての利点・欠点・注意すべき事項等についての研修を行い、万全を期して準備した。相談者は思い悩みながら電話してくださるが、匿名性が守られていることの安心感からかご自分の気持ちを率直に話してくださり、相談を受ける私共も大変嬉しかった。しかし、たとえ2時間でも確実に定期的に時間を確保できる臨床経験豊かな相談担当者の選定は困難であった。一方、相談者にとっては、日中の2時間のみでは電話しづらいこと、また、相談件数が少なかったのは、相談者による電話料金の過大な負担も影響していたと考えられる。対象となる多くの若者が使用する携帯電話の電話料金は、固定電話と比較して大変に割高であり、日常的にはメールを多用している。電話相談事業を継続させるためには、長時間の相談を安心してすることができる仕組みづくりが必要と考えている。

地域ケア総合センター長 佐々木 順子

新任教職員紹介



中田隆博 准教授
(解剖・生理・生化学)

2008年11月に健康科学講座に着任いたしました。前任地の防衛医科大学校では解剖学教室に所属し、約11年間勤めました。その間、アメリカ合衆国のジョーンズ・ホプキンス大学に2年間留学する機会がありました。本学では解剖学、生理学、生化学の教育を主に担当することになっております。研究の専門は、超微形態学、即ち、免疫組織化学法、免疫電子顕微鏡法等を用いて生体分子の局在を解明するという仕事をしております。最近はこれに加え、細胞生物学的手法を用いてチャンネル分子の細胞内領域に結合する分子の検索、また、逆にその結合分子がチャンネル分子の細胞内輸送に与える影響を調べております。

こちらに住み始めてまだ4ヶ月程ですが、北陸は自然豊かな場所で魚介類が新鮮であり、家族と過ごすには非常に良い場所であることを実感し始めております。本学の発展に少しでも貢献できればと思っております。よろしくお願いいたします。

母性・小児看護学講座紹介

現在、母性・小児看護学講座では子育て支援の活動として、子育てプログラムや祖父母の孫育て教室を実施している。子育てプログラムはカナダで開発された「ノーバディズ・パーフェクト(完璧な親なんていない)(以下NPと略す)」を基に、育児不安などをもつ母親を対象に2007年3月より計8回実施している。このプログラムのねらいは①悩みや気持ちを表現し分かち合うこと・認めること・あるいは自己受容をとおしてのエンパワーメント。②サポートし合う仲間づくり。③自分の考え方・感じ方に気づき、吟味する。④自分に合った子育てのやり方、あるいは自分の長所を見つける。⑤育児不安や困難、困惑、虐待不安等の軽減。の5つである。参加者に正解を教えるのではなく、お互いが話し合っていく中で自分の考え方・感じ方に気づき、吟味するとともに、日常生活の中に自分が出来そうな事を見つけていくプログラムである。



今までの主なテーマはイライラの対処方法が多く、その他しつけ、夫・祖父母との関係などがある。NP終了後にもNP参加者は月1回程度集まり交流しており、NPが仲間づくりのきっかけになるという効果もみられている。課題も残されているが、今後も検討を重ねながら育児に悩む方々をサポートしていきたいと考える。

キャンパスライフ

第9回看大祭を終えて

第9回の看大祭のスローガンは「Can! Go! Do! 愛」これは"世代を超えた心の交流" "みんなでEnjoy!" "地域+看大=ハート"という3つのコンセプトで成り立っています。全員が看大祭に関わり、楽しむことで絆を深め、幅広い世代の方や地域の方との繋がりを大切にしたいという思い、また何より石川県立看護大学の歴史に残るような大学祭にしたいという思いで4月から準備を進めてきました。



また今回シンポジウムとして「余命1ヶ月の花嫁」の(故)長島千恵さんのパートナー、赤須太郎さんをお招きし、生きるということ、愛、死などさまざまな角度から意見交換をしました。それと同時に若年者の乳がんを早期発見する活動として乳がん検診を実施し、予想を上回る多くの方に訪れていただきました。

当日、大学祭は無事に終わる事ができ、今年度は今までにない程の集客率で、アンケートでもお褒めのお言葉をいただき、自分たちが納得のいく大学祭になりました。大学祭が無事に成功したのは教職員の皆様をはじめ、事務の方や、そしてなにより地域の方々の暖かいご協力があってこそその成功だと考えています。

大学祭を運営することで、地域の方々との交流もでき、また何より4月から一緒に準備をしてきた仲間と感動を分かち合えることができました。この貴重な体験を生かし今後の勉学やサークル活動に役立てたいです。

本当にありがとうございました。

また次年度にも繋げていきたいのでご協力お願いします。

実行委員長 寺下めぐ美

看護大学駅伝チームの活動

私たち駅伝チームは昨年10月に誕生しました。選手とマネージャーを含めて15名の走る事やスポーツが好きな仲間と結成された同好会です。陸上競技の経験者も未経験者もあり、大会では上位を狙うよりもむしろ一人ひとりが楽しく走り完走することを目標としています。そのため、走る事が決して速いわけではありませんが、抜群のチームワークで団結力はどのチームにも負けないと思っています。日常生活でもみんなとても仲良しです。



話題としては、昨年11月に行われた河北潟一周駅伝大会において11人がたすきを繋ぎ、同好会部門で見事2位に入賞することができました。現在は、3月1日のかほく市駅伝競走大会に向けて練習に励んでいます。この時期はテストやレポートなどでとても忙しいのですが、メンバーは空き時間を見つけてそれぞれトレーニングに取り組んでいます。練習は息苦しかったり、足が痛くなったりとつらいことも多いのですが、練習後の爽快感や達成感はとても気持ち良く、日々のストレスを発散することができます。実際、トレーニングを始めてから精神的にも強くなったと感じているメンバーもいます。走る事が嫌いな人、苦手だと感じる人もぜひ一度私たちと一緒に走ってみませんか。

これからも駅伝チームは走り続けます。皆さん応援よろしくお願いします。

2年 中村 肇

この1年を振り返って



基礎看護学実習Ⅰ
1年 井上 義紀

僕にとっての初めての实習は、つまずきの連続でした。初日に施設の中で最も介護度の高い利用者がある棟を受け持ちましたが、そこでは自分から話し掛けることができなかつたり、話せても話が続かなかつたりして、とても戸惑いました。また、同じことを何度も言う利用者の方に対してイライラしてしまい、その思いが顔に出してしまうこともありました。その時は自分の感情に気を取られ、何も思わなかつたのですが、休憩時間になって思い返し、ハッとしました。自分のしたことが看護師を目指している者がやることなのか、相手の状況も理解せず簡単に感情を顔に出していいのかと反省しました。看護師はどんなことがあつても感情的にならず、冷静に相手を理解することが大切であることを学びました。

このような体験があつたからこそ、自分の改善すべきところに気付くことができました。今後の実習でも多くの体験をしたいと思います、1つ1つの体験を大切にしながら自分の良いところ、悪いところを発見していけたらいいと思います。



基礎看護学実習Ⅱ
2年 田島 祐佳

この実習では、初めて患者さんを受け持たせていただきました。実習前は、実習に対する意欲よりも、どんな患者さんを受け持つのだろう、うまくコミュニケーションが取れるだろうか、看護技術をちゃんと行えるだろうかといった不安のほうが大きかつたです。実習が始まってからは、臨床の場での看護過程の展開は初めてなことが多く、戸惑うことも多かつたけれど、担当の先生や看護師さんに教わりながら実習を進めていくうちに患者さんに必要なケアや私が患者さんにどのように関わられるかが、だんだんとわかつてきました。

実習ではいろいろなことを学びましたが、一番はコミュニケーションだと思います。自分の考えていることと相手の考えていることは必ずしも一緒ではないので、自分が相手を知ろうと思ひ、相手の立場にたつて接することで相手の思いに近づけることを学びました。今回の実習で学んだことや感じたことなどをこれから先の実習に生かしていきたいです。



第Ⅴ段階実習
3年 田中 勇氣

V段階実習で得た多くの学びの中で特に大切だと感じたことは、生活背景を含め、対象者自身を知ることです。対象とする方はどのような人生を歩んできて、普段はどのような生活を送っているのだろうか、何が好きで何が嫌いなのか…実習が進むにつれて、私はより対象者のことを知りたいという思いが強くなつていき、徐々に対象者もよく話して下さるようになり、よい関係を築くことができました。病気・治療による身体的・精神的苦痛、それによる発達段階への影響なども、看護の方向性を考える上で重要です。しかしそれだけではなく、対象のことをもっと知りたいという気持ちで関係を深め、対象の背景を知ることとても重要で、これが個別性を考えるということなのではないかと思ひました。

これから4年生になり、卒業して臨床に出ても、この実習で得た経験と知識、そして新たに発見した多くの課題は必ず自分の役に立つはずで、今後の学生生活においても、今以上に成長していきたいと思ひますし、多くの人から頼りにされる看護師になっていきたいと思ひます。



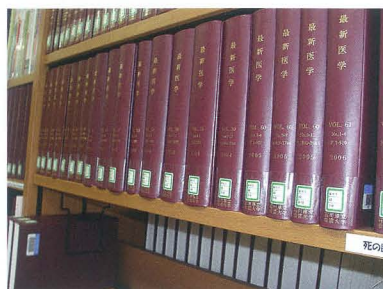
大学院
1年 長 光代

私は、14条規定による社会人入学を致しました。一般病棟での緩和ケアをサブスペシャリティとして活動をしたいと思ひ、がん看護専門看護師コースで学んでいます。

この1年を振り返ると、授業や演習では、必死な状況であつたという間の1年でした。仕事でくたくたになり何もしないで寝てしまう日があつたり、せつかくの時間をぼつと過してしまつたりと、時間を上手に使うことが大切だと痛感しています。まさにTime is Moneyです。また、看護観を構築し、人にわかりやすく伝えることの難しさを感じながらも、先生方や先輩、同期に支えられてきました。時には、院生室で、課題や研究に関して、ディスカッションをすることもありますが、お互いに自分のことのように一生懸命になって考え、多角的な視点で物事を捉える力が育つ良い環境で勉強をさせて頂いていることに感謝します。体調管理を怠らずに、実習、修士論文に向かつていきたいと思ひています。

図書館案内

ご利用については <http://www.ishikawa-nu.ac.jp/> をご覧ください。



今年度2月～3月末、石川県緊急雇用対策として、臨時職員2名による製本雑誌約5,000冊の図書登録作業を実施しました。館内所蔵雑誌一特に看護専門雑誌は、学内外の多くの利用者に利用していただいております。今回のデータ入力により、検索が容易になり、より利用し易くなりました。上記ホームページから図書館検索画面にアクセスしていただければ、所蔵検索できますのでご利用ください。

地域ケア総合センターから

平成21年度地域ケア総合センター事業について

本センターは、県立看護大学の人材と施設を活かして活動するために設置された他大学にない石川県独自の看護大学附属施設です。県立看護大学として、石川県民の健康と福祉の向上を目指してセンターは様々な活動をしています。平成21年度は、①臨床看護の質向上プログラム、②新人看護師早期離職防止バックアップ事業、③看護基礎教育における臨地実習の課題、④地域連携促進事業、⑤地域の健康づくり支援事業、⑥看護職現任教育支援事業、⑦事例検討会等の開催、⑧サービス提供事業等、各分野を定めて合計26テーマ(延べ54回)のプログラムを計画しています。また、県健康福祉部との共同研究、教員と地域関係者との調査研究によって、教員は実際の社会から学び、また研究成果を地域に還元することによって、大学と地域をつなぐ窓口としての機能を果たしています。事業計画のパンフレットや本学ホームページで詳細をご覧くださいまして、多くの皆様にご参加くださいますようお願いいたします。

地域ケア総合センター長 佐々木 順子

卒業生の内定状況

3月現在の就職・進学内定状況は、これまでに引き続き第6期生についても100%となっております。

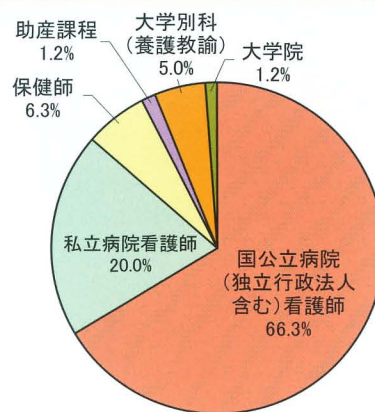
<県内就職>

石川県立中央病院
石川県立高松病院
金沢大学附属病院
国立病院機構金沢医療センター
金沢社会保険病院
公立能登総合病院
石川県済生会金沢病院
市町保健師など

<県外就職>

富山大学附属病院
福井県済生会病院
愛知県がんセンター
名古屋医療センター
京都大学附属病院
虎ノ門病院
市町村保健師など

第6期生内定状況(平成21年3月現在)



キャンパススケジュール 2009年度

前期

入学式	4月 6日(月)
ガイダンス	4月 6日(月)～4月 8日(水)
健康診断	4月 8日(水)
授業開始	4月 9日(木)
履修登録受付	4月 7日(火)～4月17日(金)
開学記念日	5月29日(金)
オープンキャンパス	7月18日(土)
補講・試験	7月30日(木)～8月 7日(金)
夏期休業	8月10日(月)～9月30日(水)

後期

授業開始	10月 1日(木)
履修登録受付	10月 1日(木)～10月 9日(金)
大学祭(看大祭)	10月31日(土)～11月 1日(日)
冬季休業	12月25日(金)～1月 6日(水)
大学入試センター試験準備日	1月15日(金)
補講・試験	2月26日(金)～3月 4日(木)
春季休業	3月10日(水)～3月31日(水)
卒業式・学位授与式	3月13日(土)予定